

平成 6 年 12 月 15 日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土資料室

(青梅市駒木町 1-684 Tel0428-23-6859)

マンサクとウラクロシジミ

まだ冬仕度の山を歩いていてマンサクの花に出会うと、つくづくもうすぐ春が来るんだなぁと感じさせてくれる。山地性の落葉小高木で、早春、黄色で細長い糸のような4弁の花を開く。

マンサクの名の由来には二通りの説がある。一つは、満作の意味で、満作は豊作と同様に穀物が豊かに実ることをいうが、この木が枝一杯に花を咲かせるので、これを満作に見立てたとの説。もう一つは早春にまっ先に咲くので、「まず咲く」が語源でこれが訛ってマンサクになったとする説。この木の枝はよくたわむことから、昔は枝をよじって薪をしばったりするのに使ったと言われる。市内では、高水山から岩茸石山にかけての稜線北側の斜面や、御岳山の越沢源頭部には本数も多い

ところで、蝶は種類によって大体食草が決まっているが、ウラクロシジミという蝶は幼虫がマンサクの若葉しか食べない。いわばマンサクの木と運命を共にしている蝶である。ウラクロシジミという名前は翅の裏が黒いことから付いたのだが、オスの翅表はきれいな真珠色でシンジュシジミという名をつければよかったになあと言う人もいる。山地性の種で一昔前は全国的に稀な種とされていた。東京に近い当時の有名な生息地は、群馬県の法師温泉や長野県の犀鉦泉で、ウラクロシジミを目当てにわざわざ出かける人も多かった。当時、東京都では市内の御岳山や奥多摩町に2～3の記録があるにすぎなかった。因みに、1978-79年に実施された環境庁の第2回自然環境保全基礎調査の東京都分では、「当時地域において絶滅の危機に瀕している種」として特定昆虫類に選定されている。

今から10数年前、マンサクの越冬芽に産まれる卵を探すことで、青梅から奥多摩にかけても意外に生息していることが分かってきた。市内では、まず御岳山と、成木の極指から高水山にかけて生息していることが確認された。続いて1980年、柚木の愛后神社の脇で発見されたが、ここは発生木のマンサクがその後切られ、いなくなってしまった。更に、1984年、もう一寸東側の柚木の即清寺の裏山でも発見された。この場所はいま奥多摩山地の、また東京都のウラクロシジミの分布の最も標高の低い下限生息地となっている。

6月中旬、成虫が飛ぶのは夕刻なので黄昏時に訪れると、翅表の真珠色をチカチカさせながらマンサクの林の梢上を飛ぶこの蝶に出会えるだろう。

＊ 青梅市教育委員会発行新書籍のご案内 ＊

- ・『青梅市仏像彫刻調査概報Ⅱ』 頒価 500円

大門地区、新町地区、青梅地区の寺院所有の調査報告。

- ・好評で品切れとなっておりました『青梅を歩く本』が、一部改訂し増刷致しました。
頒価は1,000円となっております。